

仙台市青葉区

川平団地町内会自主防災会

に学ぶ



▲平成23年1月1日の川平団地町内会。2年前から、毎月1日を「防災の日」と決めて、町内に約127本ののぼり旗を掲げ、住民の防災意識を高める活動を実施しています。また、昨年4月からは、15台ある防災無線機の通話試験も実施しています。「防災に正月なし!」と言ったところでしょうか。

町内会イコール自主防災会

仙台市青葉区の川平団地町内会は、仙台市の中心部から北西に約5km、仙台北環状線沿いの泉区と接する地域にあります。仙台市中心部に近いこの地域を、昭和51年から宅地造成を行い、昭和54年8月に48世帯で町内会を結成しました。仙台市中心部に近いベッタウンである川平団地町内会は、会員数1,358世帯。町内会組織と自主防災組織を同じ会員で構成し、「川平団地町内会自主防災会」として、仙台市で模

範となる活発な活動を行っています。

仙台市のベッタウンとして出発した地域ですが、30年が経過した今、少子高齢化が進んでいる地域でもあります。こうした状況の中、5年後、10年後の地域のために、防災対策をしっかりとしなければならぬと考え、平成21年度から仙台市のモデル事業にも取り組んでいます。

この川平団地町内会自主防災会の取り組みを、同町内会の高島新副会長に話を伺いました。



県内の自主防災組織結成状況

平成22年版消防白書(消防庁)によると、35市町村で770,537世帯が自主防災組織に加入しており、結成率は85.0%となっています。

自主防災会は昭和56年結成

川平団地町内会自主防災会は、昭和53年6月12日に発生した宮城県沖地震の3年後に結成しました。当時、仙台市では町内会を母体とした自主防災組織の市民運動を展開し、組織化した町内会には担架や救急箱、パールなどの防災資材が仙台市から支給されるため、防災計画と規約を作り結成した町内会が多かったと聞いています。

昭和56年2月に結成したときは、町内会の会則に自主防災組

織が盛り込まれておらず、また、誰が何をするのか分からない状態でした。

活動と言えば、たまに消防署の指導で講習会程度のものである程度のことぐらいであったと聞いています。

実践できる組織を目指して

平成7年1月の阪神・淡路大震災の発生後、町内会の中で自主防災の大切さが高まってきました。また、平成17年1月に、宮城県沖地震は今後30年以内に

99%の確率で発生すると、政府地震調査研究推進本部が発表したこと、意識はさらに加速されました。

自主防災組織を町内会と直結したものとするため、平成17年度の町内会総会で検討委員会を設置しました。7人のメンバーで約3年を費やして、平成20年の町内会総会で、実践できる自主防災組織へと生まれ変わりました。

しかし、苦労したのはその後。具体的な年間活動計画と実施内容の策定でした。

「防災の日」の設定をはじめ、防災ニュースの発行、防災教室の開催、要援護者の支援、防災マニュアルの作成、災害時の初動対応方法および防災訓練の実施など、数多くの検討項目があったため、企画委員会を設置し検討に入りました。

この中で、新しい防災資材をそろえることが大きな課題となりました。結成時に仙台市から支給された防災資材は老朽化が激しく、今後の活動のためには絶対必要なものでした。

幸い、公共下水道の整備が完了し、今まであった下水組合が解散、その分配金を基金として、その一部を取り崩して資材をそろえることができました。

新たな取り組みへの挑戦

各世帯に配布する防災マニュアルを作成しているとき、災害時の情報連絡体制をはじめ避難所の開設・運営方法、ごみ処理などの環境衛生、地域防犯や災害ボランティアの対応など、私たちの地区と仙台市地域防災計画の連携体制が明確になっていないことに気付きました。

仙台市に提案したところモデル事業として採択され、昨年4月25日に川平学区内の6つの町内会をはじめ小中学校、病院、福祉施設などにより「川平地区防災対策連絡協議会」を設立しました。5月から12月まで毎月1回、応急、避難所、地域の3部門に分かれ、検討を重ねてきました。

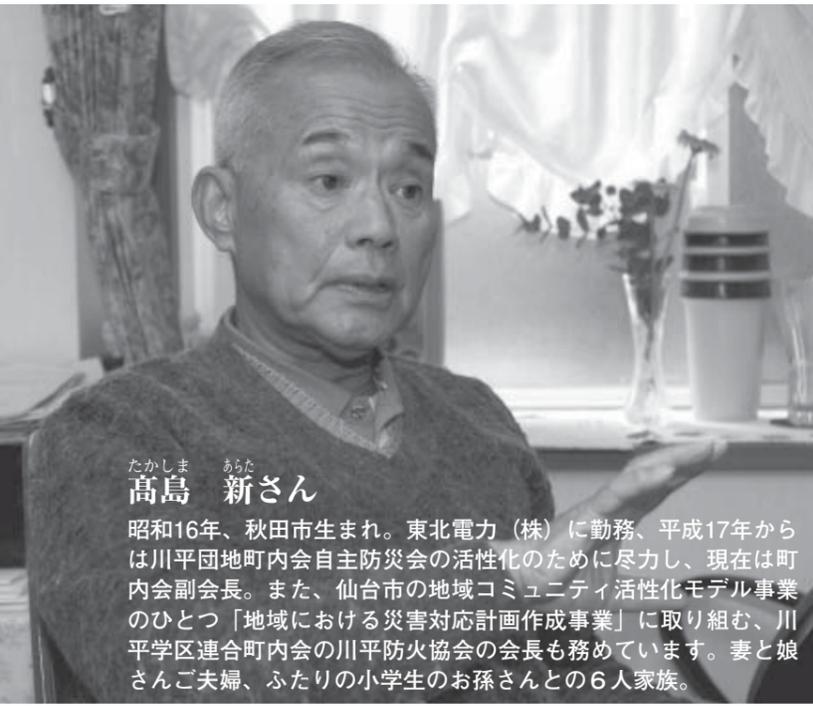
ようやく、12月の専門部会で、その災害対応計画案が集約できました。この計画案に、さらに多くの住民の意見を反映させるため「ワークショップ」を開催し、最終案を4月開催予定の協議会総会に提案するまでこぎ着けることができました。

継続にはリーダーが絶対必要

自主防災組織で一番大切なことは、「防災リーダーの育成」だと実感しました。若い皆さんは、仕事が忙しく中心的な役割を果たすことは、非常に難しい状況です。私は60歳から70歳までの健康な皆さんに、将来の地域と子孫のために一頑張りしてほしいとお願いしています。

災害はどのような被害が発生するのかわかりません。川平地区は、昭和53年の宮城県沖地震で大きな被害がなかったため、地域防災に対する活動への理解がなかなか得られませんでした。自主防災組織化により、日ごろからの一人一人の備えや、隣近所の協力による災害に立ち向かう強い意志と行動があれば、被害を最小限にとどめることは十分可能であるとの認識が日増しに高まってきました。さらに、この認識をモデル事業が後押ししてくれているように喜んでいきます。

行政と連携がとれた災害対応計画づくりを契機として、今さらバラに行っている町内会の自主防災活動を金太郎飴のように統一していくことが、私の願いです。



たかしま たか 高島 新さん

昭和16年、秋田市生まれ。東北電力(株)に勤務、平成17年からは川平団地町内会自主防災会の活性化のために尽力し、現在は町内会副会長。また、仙台市の地域コミュニティ活性化モデル事業のひとつ「地域における災害対応計画作成事業」に取り組む、川平学区連合町内会の川平防火協会の会長も務めています。妻と娘さんご夫婦、ふたりの小学生のお孫さんとの6人家族。



災害